

日本IT書紀

044 展示会

03 未剖篇
卷之五 靉黠

佃均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第四十四

展示会

一

『日本アイ・ビー・エム50年史』などによると、森村商事がコンピューティング・タビュレーターディング・レコーディング（CTR）社とホレリス式統計会計機械装置の東洋代理店契約を結ぶに当たって、その立役者は水品浩という一個人であったかの印象を受ける。なるほど、水品浩という人材がいなければ、ホレリス式統計会計機械装置は一九二五年の時点で日本に輸入されなかつたかもしれない。しかし、当の社長である森村市左衛門が統計会計機械装置の有用性を理解し、自社の新規事業として将来に期待していなければ、水品の構想は実現しなかつた。また、日本陶器の加藤理三郎が統計会計機械装置の導入に強い意向を継続して示していなければ、森村商事による輸入は達成されなかつたといつていい。

さらにいえば、ニューヨーク副支配人の中山武夫が、水品浩をしてCTR社エンディコットの工場で研修させてい

なければ、CTR社副社長のブレトマイヤーがアジア市場の将来性を見ていなかつたなら——つまり加藤理三郎、森村市左衛門、中山武夫、水品浩など、明治生まれの気骨が、日本にホレリス式統計会計機械装置をもたらしたのだった。一九二五年の五月、モリムラ・ブラザーズ・カンパニーのニューヨーク副支配人・中山武夫は、日本の森村商事本社に宛てて一通の手紙を送った。CTR社エンディコット工場で研修を終えた水品浩が、機械の積み出しに先立ってシアトル経由で日本に向かつたことを告げ、CTR社との代理店契約が無事に締結されたことを報告したのもだった。その中で中山はこう記している。

日陶ニ於テ愈々実用ノ曉キハ其活用ノ程度ニ依リ内地緒工業銀行ニ使用セシムルノ途ハ充分有之事ト信ジ申候、此器械ハ保險会社、鉄道、政府、紡績会社等活用シテ此レヨリ利益ヲ得ン事ハ確實。

日本陶器名古屋事務所に設置されたホレリス式統計会計機械装置は、五段タービュレーター一台、ソーター、電気式穿孔機、パンチカード、付属品一式で総額は四千七百七十二ドル二十一セント、輸入関税が二千百六十九円一錢だつた。当時の為替レートで一ドル＝二円とすると、関税を合

め一万二千円以上になる。

——一万円の貯金があれば、利子だけで食べていける。
と当時は言われていた。

一九二五年における男子職工の給与を調べると、初任給は月額二十円前後だった。一般の企業が事務用に使っていたタイガー式計算器の最高モデルが約五百円だった。このことを考えると、アメリカ製の統計会計機械装置がいかに高価だったかが分かる。

日本陶器に向けたホレリス式統計会計機械装置が到着した直後、通信省の貯金局から引き合いがあった。続いて一九二六年六月に三菱造船神戸造船所が国内第二号ユーザーとなる契約を結んだ。

三菱造船は次いで二七年、長崎造船所にもホレリス式を採用した。同社は一九二二年の軍縮以来の造船不況に対応するため、経営合理化の一環として事務の機械化を調査・研究していたのだった。

出だしは順調に見えた。ところが、国内経済は悪化の一途をたどっていた。第一次世界大戦で傷ついたヨーロッパ経済が持ち直し、日本からの輸出に依存する必要がなくなつた。加えて陸軍の規模縮小が国内経済を減速させた。

CTR社が原則としていたレンタル制度も日本の企業に馴染まなかつた。ばかりでなく、レンタル契約の前提とさ

れたパンチカード年間四万枚購入要件や保守サポート費などランニングコストがネックになった。

一九二五年に日本陶器、二六年に三菱造船神戸造船所、二七年に同社長崎造船所と、年間一セットの契約が精一杯で、引き合いも伸び悩んだ。

森村市左衛門と水品浩は、「一年間に五台の契約を取る」というCTR社との契約を果たすには、思い切った手が必要と考えた。世の中に広く、統計会計機のことを知ってもらわなければならない。機械装置がどのようなもので、どのように動かし、どのような効果があるか。しかし広告をすれば売れるようなものではない。

そこで森村市左衛門は一九二六年（大正十五）の十一月、東京・銀座四丁目にあつた森村銀行で、ホレリス式統計会計機械装置の展示会を催すことにした。このために日本陶器に設置されていたマシンが搬入され、岩田壮一も随行して実演に当たつた。

さらに森村商事は、展示用として最新式の電気式ソーター、電気式パンチマシン、ペリファイヤーなどを輸入して公開した。ソーターはホリゾンタル（水平）型だったとされる。国内初の計算機展示会がこうして開かれた。森村の声がけとあれば、政財界の要人は見に行かないわけにはいかない。

二

展示会は十一月十九日から二週間にわたって開かれ、中央官庁をはじめ金融機関、保険会社、大手製造業の要人が招待された。招待状には

最新式にして機能顕著なることは申上げるまでもなく現に米國に於て普く使用せられ日日の計算、統計及調査等殆ど応用せられざるなく到底人力を以て企図し得ざる効果を挙げ居り其使用の有無は事業の振否に関係する程の有様にこれあり実地操作の状態を親しく御覽なされたく……。

とあった。

また、モリムラ・ブラザース・カンパニー副支配人の中山武夫は本社に宛てて、

「此機械ノ照会ハギリギリト根強ク進ム」

というメッセージをニューヨークから送っている。

機械の操作実演は水品が担当し、それぞれの機械装置の機能・性能、使用方法などを解説した。今でいう「プレゼンテーション」は、機械装置の性能や操作方法に力点を置かず、レンタル制度のメリットについて強く理解を求める

ものだったという。

大きな期待をかけた展示会だったが、数百人の来場があったにもかかわらず、受注に結びつきそうな引き合いは一件もなかった。森村市左衛門は起死回生の受注拡大をねらったものの、これでは自社の経営幹部を説得することができない。事業を継続するにはリスクが大きすぎた。

そこで彼は、同じ銀座界隈で輸入事務機器販売を営んでいた黒澤貞二郎に相談を持ちかけた。このとき黒澤は、関東大震災の打撃からようやく立ち直ったときだった。

「CTR社の条件次第では、代理店契約を肩代わりしてもいい」という回答だった。この話はのちほど詳述する。

この黒澤貞次郎という人物は、一八七五年（明治八）、東京・京橋の生まれというから、ホレリス式統計会計機械装置の営業権を譲り受けたときは五十二歳、すでに初老の域に達していた。

真珠の御木本幸吉、服部時計店の服部金太郎と並んで「銀座の三偉人」とも称された。三人はともに、若いころ辛苦を経験し独創的な仕事で成功した。その共通点が、お互いを引き寄せたといえなくもない。

ちなみに御木本幸吉は安政五年（一八五八）、三重に生まれ、家業のうどん屋を継いだ。一八九六年、一念発起し

て伊勢・英虞湾に浮かぶ多徳島に真珠の養殖場を設け、研究に着手した。一九〇五年、真田真珠の養殖に成功した。またたくうちに世界のパール市場の六割のシェアを獲得した。

ずっとのちのことだが、第二次大戦中、真珠は奢侈品ということで養殖を禁じられた。しかし幸吉はこれに服せず養殖を続けたために、「非国民」の罵声が浴びせられた。

一九五四年没、享年九十六。

服部金太郎は万延元年（一八六〇）、江戸に生まれ、夜店の小僧から時計の修繕工になった。一八八一年に独立して服部時計店を開業し、八七年に現在の銀座四丁目角に店を構えた。当初は輸入時計を専門に扱ったが、九二年「精工舎」を興して柱時計や置き時計などの組み立てを始めた。

一九一三年（大正二）、国産初の腕時計「リール」（リール）を完成させ、第一次大戦の時、スイスの時計産業が打撃を受けた肩代わりとして輸出することに成功した。日本の精密機械技術を世界に知らしめるきっかけとなった。のち貴族院議員。一九三四年没、享年七十三。

三人は回り持ちでそれぞれのオフィスに集まっては、食事をしたりお茶を飲んだりした。

このうち、御木本幸吉も森村市太郎、開作の世話になっている。

彼が養殖に成功した真珠は森村商事が輸出窓口となり、アメリカで大評判となった。神秘的な輝きを持つ真珠はまさに欧米人が喜びそうな、日本的なるものだった。「ミキモトパール」の名が世界に知られたのは、森村商事によるところが大きい。

御木本、服部とともに典型的な明治立志伝中の人物だが、黒澤は一風変わっている。

尋常小学校を卒業すると、十歳で日本橋の薬問屋に丁稚として奉公した。独力で英語を学び、十六歳のとき、奉公で貯めた金をすべてはたいて単身で渡米した。アメリカのゴールドラッシュは終息していたが、坂本龍馬が言ったと伝えられる「平民でも統領になれる国」のイメージが海を渡ることを決意させたのに違いない。

シアトル魚港で魚洗いや鉄道工夫の仕事で小金をため、シカゴ市を経由してニューヨーク市にたどり着いた。ニューヨーク市では、事務機器販売会社の経営者宅で下男として働いた。雇い主はタイプライターの製造・販売を行っていたエリオット・ハッチである。

ハッチは黒澤の勤勉さと能力を評価して自身が経営するエリオット&ハッチ・ブック・タイプライター社の社員にした。次いで「タイプライターがどうやって作られるのかを知りたい」という黒澤の要望で、タイプライター・メー

カーのスマス・コロナ社に就職を世話した。

一九〇一年（明治三十四）に帰国するとすぐ、東京市京橋区弥左衛門町一番地に「黒澤貞次郎商店」の看板を掲げた。アメリカで世話になったエリオット・ハッチ社とタイプライターの代理店契約を結んで、輸入事務機器の販売を始めたのである。

扱ったのは自動番号押印機や文書ファイリング機、万年筆、カーボン複写紙などだった。その中にはバロース社の計算機も入っていた。事務機器・用品ブームを受けて、黒澤の事業は順調に拡大した。

帰国した年に、彼は英文タイプライターに工夫をほどこしてカナ文字のタイプライターを試作した。また滞米中に会った逓信省の役人から得た知識を応用して、電送印字装置の開発にも挑戦している。

のち、一九二八年に緑綬褒章の栄を受けたとき、カナ文字タイプライターの開発を思い立った動機を、次のように説明している。

アメリカの子供達が文字の簡易のため、如何にもたやすく、小学教育を受けつつあるを目撃して、我が国でも漢字を廃し、かなもじを採用したらばと強く感じたのが、タイプライター業に従事する動機でありました。

文字の理解に着目したのは卓見というべきであった。知識を得、情報を共有し、何かを創り出し、それを他者に伝えることこそが、デモクラシーの根源であることを、黒澤は気がついていた。

しかし彼は偏屈に「かなもじ」にこだわらなかつた。漢字の簡素化を訴え、日常生活に必要な漢字とはどういうものかを探ろうとした。当用漢字の考え方に通じるものがある。

この考え方は逓信大臣だった前島密に伝達され、前島はそれをヒントに漢字を簡易化することを思いついた。数字に限れば「壺」「壹」を「一」、「貳」「弍」を「二」、「拾」を「十」、「阡」を「千」、「萬」を「万」二、という具合である。

同時に田舎から出てきた勤労者が郷里に送金するための仕組みを考えていた前島は、その手始めに

——業務に使う数字を漢字からアラビア数字に変更すべきである。

と説いた。

漢数字では誤記や勘違いが発生し、かつ集計に手間がかかる。

「算用数字」という呼び名がここから生まれた。

三

タイプライターには余談がある。

東京帝大の田中館愛橋である。

田中館愛橋は安政三年（二八五六）、岩手県の二戸に生まれた。東京帝国大学でアメリカ人講師メンデンホールに師事して理学を学んだ。一八九一年十月二十八日に起こった濃尾大地震（推定マグニチュード8・0）をきっかけに設けられた震災予防調査会で中心的に活動し、日本全国の地磁気を測定した。

純粹物理学のほか、重力・地磁気・地震・度量衡などにも多くの業績を残し、「日本の地球物理学の育ての親」と称される。

学士院会員・貴族院議員として科学振興に務め、国際連盟の知的協力委員としても活躍した。一九四四年（昭和十九）第一回の文化勲章を受章し、戦後に入って随筆『葛の根』などを著した。一九五二年（昭和二十七年）没、享年九十六。故郷二戸市に記念館がある。

この人物は一方で「ローマ字博士」の異名を取っている。黒澤貞二郎が

——かなもじを採用したらば如何。

と、国字改良論を唱えていた前島密に提言したのと同じころ、田中館は

——ローマ字を普及させるべきである。

という考えを持っていた。

黒澤、田中館の二人に共通しているのは、国語の平易化と文書作成の高能率化が、政治の民主化や経済の発展に役立つと信じていたことだった。このため田中館は一八八五年（明治十八）に「羅馬字会」を発足させ、黒澤商店や三井物産からアメリカ製タイプライターを何台も購入して、ローマ字に適したキー配列を考案したりしている。

田中館が万国測地学会議に出席した折、それまで手書きの複写で時間がかかっていた会議録を、自ら考案したタイプライターで速打した。これが速記録の源流となった。同博士のキー配列が採用されていれば、こんにちのパソコン用キーボードは違ったものになっていたかもしれない。

キーボードの話が出たので、ついでにそのことにも触れておきたい。

現在、主流のキー配列は「QWERTY（クワイティ）」方式と呼ばれる。アルファベットが、いちばん左上から右に「Q」「W」「E」……の順で並んでいる。この文字配列を最初に採用したのはレミントン・スタンダード・タイプライター社——いづれこの会社がパワーズ・カウンティン

グ社を買収することになる——だった。アメリカの政府機関と軍が同社のタイプライターを制式採用したために、一挙にデファクト・スタンダードとなった。

——タイプライターの販売員がデモをするとき、「TYPE WRITER」という文字を上段一列で打てるようにした。

という説もあるが、それだけでない別の理由があった。

——アルファベットの頻度の高い文字を中央に配置し、かつ統計をもとに、左右の指が効率的に働くよう、合理的に組み合わせた。

つまり欧文を打ちやすくした、というのだが、これはどうやら間違いであるらしい。

タイプライターは活字にアームが付いていて、キーを押すとアームが起動して用紙の面を打刻する。慣れてくるとキーを打つ速度が著しく速くなって、複数のアームが宙を舞い、ときとしぶつかり、絡み合い、遂にはお互いを破壊し合う。それはまずかるう、というので、反対に打ちにくくした。

のちにコンピュータでも同じことが起こった。打ちやすくとすると、コンピュータが処理しきれないことがあった。

演算装置の速度が、キー・インについていけなかった、ということ、現在ではとうてい信じられないが、キーボ

ード入力に対応した初期の計算機にはしばしばそういうことが起こった。操作をしにくくするというのも、人間の知恵なのである。

~~~~~ 補注 ~~~~~

陸軍の規模縮小 いわゆる「宇垣軍縮」。加藤高明内閣の陸軍大臣で陸軍内で最大派閥の領袖だった宇垣一成が断行した。大日本帝國陸軍を構成する二十一の師団のうち師団四、連隊区司令部十六、陸軍病院五、幼年学校二、人員三万四千人、軍馬六千頭が削減された。関東大震災復興費、シベリア出兵の経費などを捻出する必要があった。また人員削減で捻出された費用の一部で兵備兵装を最新式に更新することも可能になった。

森村銀行 東京・銀座四丁目にあり、のち三菱銀行に吸収された。現在に残る建物図面によると、総大理石造り二階建てで、正面には四本のギリシア風円柱が立ち、総床面積約五百八十坪（一千九百平方メートル）という立派なものだった。ホレリス式会計機械装置の販売部門はこの建物の二階に事務所を置いていた。

日本的なるもの 二十世紀に入るとジャポニズムの興味は一時期の絢爛豪華な装飾性を脱し、日本画の簡素さや俳句・茶道の侘び・寂びに移っていた。

スミス・コロナ社 黒澤が入社した当時の社名は「スミス・プレミア・タイプライター・カンパニー」(Smith Premier Typewriter Company)だった。ニューヨーク州シラキュースに本拠を置いていた。一九〇三年、「L・C・スミス・アンド・ブラザーズ・タイプライター・カンパニー」(L. C. Smith & Bros. Typewriter Company)と改称した。

東京市京橋区弥左衛門町一番地 のちの東京都中央区銀座四丁目二番地に当たる。

メンデンホール T.C.Mendenhall / 1841 ~ 1924。東京帝國大学講師として赴任した直後の一八八〇年(明治十三)二月二十二日、関東地方にかなり強い地震が発生した。同じく東京帝大で地質学を教えていたイギリス人講師ジョン・ミルン(John Milne / 1850 ~ 1913)が地震研究の必要性を訴えたのに賛同し、世界初の地震専門の学会「日本地震学会」を創設した。

一八九八年にアラスカの上空をプロペラ機で飛び、初めて氷河の写真撮影に成功した。彼が発見した氷河は「メンデンホール氷河」と名づけられ、氷河観測の指標となっている。

濃尾大地震 被害は建物全壊十四万二千七百七十七戸、半壊一万八千八百八十四戸、死者七千二百七十三人に達した。被害の地域は、岐阜、愛知、福井、石川、滋賀、三重の六県に及んだ。この地震を契機に、わが国の地震学の研究が始まった。

羅馬字会 のち「日本ローマ字会」と改称し、現在は公益財団法人日本のローマ字社となっている。

前島 密 まえじま・ひそか / 1835 ~ 1919。越後国(新潟県)高田藩士上野家に生まれ、旗本前島家の養子に入った。はじめ医学を志し幕府の函館諸術調所で洋学を学び、一八六九年(明治二)維新政府に出仕した。翌年ヨーロッパに渡って近代諸制度を見学した経験を生かして郵便制度と郵便為替・貯金精度および、電話・電信の基礎を築いた。一八八一年(明治十四)大隈重信とともに下野し、北越鉄道、東館汽船、石狩石炭、日清生命保険などの経営に参画した。黒澤貞次郎が「かな文字」を提言したのは、前島は一時的に通信省に復帰したときだった。

日本IT書紀 044 展示会

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。